

論文要旨 Dissertation Abstract

令和 2 年 3 月 13 日

Date (YY/MM/DD):

専攻 Major 環境イノベーション マネジメント	学籍番号 Student ID 15TE003	氏名 Name 山川 伊津子
論文題目 Dissertation Title	盲導犬と暮らすことによる視覚障害者の生活と意識の変容 ー機能的・心理的・社会的支援の視点からー	
第 1 章 序論 我が国では、2014 年の障害者権利条約の批准に伴い障害に関わる様々な法整備を整えてきたが、障害を有する人々の生活には依然として様々な困難が存在する。身体障害の一種である視覚障害者は、見え方により全盲か弱視、受障の時期から先天が中途（後天）に分けられ、心理面と生活面において問題を有する。心理的問題としては、受障の時期により抱える問題も異なるが、特に中途視覚障害者はその絶望感から約 6 割が自死を考えると報告もある ¹⁾ 。他の一つは移動の問題であり、視覚障害者の屋外移動には常に危険が伴う。同伴者との歩行が安全ではあるが、単独歩行の場合は多くの視覚障害者が白杖を使用する。しかし、道路交通法に定められたもう一つの歩行手段として、盲導犬使用がある。盲導犬は、介助犬、聴導犬と共に身体障害者補助犬法（以下、補助犬法）に定められた障害者補助犬（以下、補助犬）の一種で、視覚障害者の屋外歩行を安全に誘導する。現在実働する盲導犬は 928 頭であり（2018 年 3 月）、使用者は視覚障害者の約 0.3% であるが、その満足度は高いといわれている ²⁾ 。盲導犬は機能的支援に加え、心理的支援、社会的支援を含め使用者を支えると言われているが、盲導犬と暮らすことで使用者がどのようなプロセスを経て生活や気持ちを変化させるのかに焦点を当てた研究は認められない。本稿では 3 つの研究を通し、視覚障害者が盲導犬という「生きた自助具」を使用することによる生きることへの変化を、その課題も含めて検討することを目的とした。		
第 2 章 盲導犬使用者と白杖使用者の生活の質（QOL）に関する比較調査 視覚障害者が有する生活上の問題の一つに移動の困難がある。屋外における単独歩行手段として白杖歩行と盲導犬歩行があるが、盲導犬使用者は現在 1,000 人にも満たない。石上らの研究では、白杖から盲導犬へ移行した使用者を対象として白杖使用時（過去）と盲導犬使用時（現在）の QOL を比較調査し、盲導犬使用時の方が QOL が高い結果となったことを報告している ³⁾ 。本研究では、盲導犬使用者と盲導犬を使用していない白杖使用者に QOL に関する調査を実施し、歩行手段の違いが対象者の QOL に関連するのかを検討することとした。 対象者は、盲導犬使用者 36 名と白杖使用者 28 名であった。調査内容は QOL に関する 31 項目と属性とし、調査方法は電話によるヒアリング、電子メール、郵送より各対象者が選択した。統計分析の結果、31 項目中危険率 5% で 4 項目に、10% ではさらに 1 項目に有意差が認められ、5 項目全てにおいて盲導犬使用者の得点が高かった。 本研究の結果より、行動範囲が広がり、一部社会参加を果たし、他者に気兼ねすることなく生活している盲導犬使用者の姿が認められた。本調査において有意差が得られたのは特定の項目に限られていたが、盲導犬の存在が視覚障害者の QOL 向上に有効であると考えられた。		
第 3 章 中途視覚障害者が盲導犬と共に生きることで生じる変容プロセス 研究 1 において、盲導犬と白杖という視覚障害者の屋外での歩行手段の違いが当事者の QOL に影響を与え、盲導犬使用による QOL の高さが一部認められた。本研究においては、		

盲導犬と暮らすことにより、中途視覚障害を有する使用者がイヌからどのような支援を得て生活や気持ちを変容させていくのか、そのプロセスを検討することとした。

中途受障の盲導犬使用者 9 名を対象に半構造化面接を実施し、Modified Grounded Theory Approach(修正版 M-GTA)を用いて分析を行った。質的研究の一種である修正版 M-GTA の適性は、社会相互作用に関わる研究であること、ヒューマンサービス領域の研究であること、対象とする現象がプロセス性をもっていることがあげられる。分析方法としては、テキスト化したデータを分析テーマに沿って概念生成し、概念間の関係性を考えながら、次のステップであるカテゴリーを生成し、カテゴリーの関係を検討して全体的なプロセスを見ていく⁴⁾。

分析結果から、19 の概念と 6 カテゴリーに生成できた。中途受障の盲導犬使用者の変容過程は、盲導犬との出会いの前後で大きく 2 つに分けられた。受障や白杖使用と格闘しつつ盲導犬との出会いがあり、徐々に生活や気持ちを変化させ、社会参加のしやすさや社会参加への意欲を手にしていった。最終的に、障害を抱えながらも社会の中で盲導犬と共に意欲的、主体的に生きなおす姿が理解できた。盲導犬使用はすべての視覚障害者に有用であるとは言えないものの、中途視覚障害という厳しい体験をした当事者が盲導犬と共に生きなおすことへの可能性が示唆された。

第 4 章 盲導犬使用者のライフストーリーからみる使用者と盲導犬の関係

本研究では、研究 2 の対象者のなかから 3 名のライフストーリーと通し、事例検討した。ライフストーリーは、ライフヒストリーと互換的に使われる場合もあり、語り(口述)による個人の経験(物語)から、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする分析方法である⁵⁾。ここでは 3 名の対象者が、盲導犬と出会い生活を共にしていく中で意識や行動を変化させたのか、そのプロセスを個別に検討し、それぞれの使用者と盲導犬の関係及び使用者の変化を検討した。

一人目の S さんは、70 代の独居女性であり、現在 3 代目の盲導犬と暮らしている。50 代半ばで病気により視力を失った彼女は、突然の受障で鬱を発症し、自死念慮もあった。一人暮らしの希望から盲導犬使用を決めるが、はじめはうまく歩けず苦労した。徐々に盲導犬と共にその生活範囲や他者との関係を広げ、見えないことを忘れるほどの自然で穏やかな生活を送っている。唯一の心配事は、盲導犬に何かあったらどうしようということだが、元気であれば 4 代目の盲導犬とも歩きたいと希望している。

二人目の O さんは鍼灸師で、2 代目の盲導犬と共に家族と暮らしている。視覚障害の友人の盲導犬と出会ったことで、その魅力に触れて使用を決めた。30 代半ばで受障し、視覚障害が進んだ段階で仕事を辞めて鍼灸師の資格を取り、開業と共に盲導犬使用が可能となるように計画をたてた。O さんにとって、盲導犬は散歩ができる楽しい歩行を可能にし、外出の頻度と範囲を広げ、他者とのコミュニケーションの拡大にも一躍を担うという。また、共に暮らすパートナーとしても愉快的な仲間である。同時に、「生きた自助具」である盲導犬の生活の質についても憂慮し、治療家としてヒトとイヌの両者の健康を保つことを心掛けている。

3 人目の I さんは、2 代目の盲導犬と共に家族と暮らす主婦である。幼い頃から見えにくさで悩み、高校生の時に障害告知を受けた。夢を諦めた後結婚し、子育てをする中白杖の訓練を受けるがうまくいかず、歩行指導員から盲導犬の提案を受けた。体験歩行で盲導犬との歩行に魅了された I さんは、3 年待ちようやく 1 代目の盲導犬と暮らし始めた。好きな時に一人で外出できる自由を手に入れ、仲間や支援者との輪が広がり、見えないことで諦めていたことにも挑戦できるようになった。ただ、突然重い病を発症して亡くなった 1 代目との別れのつらさと新たな盲導犬と歩く難しさも経験した。

(続葉) (Continued)

3名の対象者のライフストーリーからは、盲導犬との出会いにより、屋外歩行、他者との関係、自分自身の気持ちが大きく変化したことが理解できた。ただ3名とも盲導犬使用は偶発的な面もあり、当事者に盲導犬についての情報をどのように手渡していくかは早急な課題である。また、盲導犬との別れが使用者にもたらすものは大きく、心理的なケアの体制整備も必要とされる。

第5章 結論

3つの研究を通し、盲導犬が歩行、他者との関係、使用者の心理を支援することで、当事者の生活と意識にポジティブな変化をもたらしていたことが理解できた。なぜこのような効果が得られるのかという要因を、イヌという生き物の特性として考えることができる。最古の家畜であるイヌは、ヒトと暮らしてきた3万年以上の長い歴史の中で、言語を用いないコミュニケーション能力や愛着や信頼関係の構築を可能としてきた。イヌとのこのような関係性が盲導犬と使用者との間においても大きく働き、当事者の変容を促す要因となっていると考えることができる。しかし、「生きた自助具」である盲導犬には日々のケアや病気やケガ、年齢的な制限や経済的な問題に加え同伴拒否、さらには「盲導犬はかわいそう」というスティグマもある。使用者はこれらの課題を抱えながら盲導犬とパートナーとして暮らしていく。それでも盲導犬との生活の満足度が高いということは、3つの研究を通して見てきたものが使用者にとって大きな価値があるためであろう。そのような盲導犬の情報をどのように視覚障害当事者に手渡していけばいいのか。特に行動範囲や情報が徐々に狭まっていく中途視覚障害への対策は重要である。視覚を失う（持たない）という大きな障害を持ちながら盲導犬と暮らすという選択肢が多く当事者に届くことを期待したい。

引用文献

1. 山田幸男・大石正夫・小島紀代子（2012）目の不自由な人の“こころのケア”—本当のこころの杖となるために—、考古堂、13.
2. 日本財団（1998）「盲導犬に関する調査」結果報告書 <https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1998/00001/mokuji.ht>（2019年4月15日閲覧）
3. 石上智美・徳田克己（2005）盲導犬使用が視覚障害者のQOLに与える影響—盲導犬使用時と白杖使用時の比較を通して—、*The Asian Journal of Disable Society*, 5, 13-24.
4. 木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い、弘文堂、31-46.
5. 桜井厚（2012）ライフストーリー論、弘文堂、6.